

トーマス・マンのウォルト・ホイットマン解釈 について

須 摩 肇

I

トーマス・マンのウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) (1819—1892) 解釈に関して考える場合、まず頭に浮かぶのは、1922年10月15日の講演『ドイツ共和国について』 (*Von deutscher Republik*) であろう。というのはマンはその中でホイットマンとノヴァーリス (Novalis) を再三再四引用しているからである。マンもこの講演の事を「この変わった組み合わせ (dies wunderliche Paar), つまりノヴァーリスとホイットマンについての講演として構想された」 (GW. XI. S. 832) と説明している。

マンがホイットマンに言及しているのはこの講演が初めてではない。ここでは彼のホイットマンに関する最初の発言について考えてみよう。

1909年8月26日の友人ヴァルター・オーピッツ (Walter Opitz) への手紙の中で、マンはヴァーグナー (Wagner) への情熱が最近弱まってきたことに触れて、続いて「若い人達にウォルト・ホイットマンは彼 [筆者注：ヴァーグナー] よりも影響を及ぼしていると思う」¹⁾と述べている。この発言とほぼ同じものが、1908年から9年にかけて書かれた覚書『精神と芸術』 (*Geist und Kunst*) にも見られる。トーマス・マンのヴァーグナー批判は1907年2月から3月にかけて執筆された『演劇試論』 (*Versuch über das Theater*) の頃から始まるわけであるが、ヴァーグナーを無条件に礼讃することなく、一定の距離を置こうとしていた時期であった。勿論マンのこの「批判」は、ニーチェ (Fr. Nietzsche) より受け継がれたものであった。

この頃にホイットマンの噂にマンは注意を向け始める。しかし彼のホ

ホイットマンに対する印象は決して肯定的なものではなかったようだ。例えば1910年1月11日クルト・マルテンス (Kurt Martens) 宛の手紙の中でマンは、ヘルマン・パール (Hermann Bahr) がホイットマンの「インディアン的ルソー主義」(indianischer Rousseauismus) や、ドイツの民主主義的な運動に傾倒していると半ば嘲笑的に述べている。(Vgl. Mann, Erika (Hg.) 1978, S. 79) ³ 「インディアン的ルソー主義」という言葉は、上述の『精神と芸術』にも「本当にこのインディアン的なルソー精神 (dieser indianische Rousseau-Geist) はヨーロッパで勝利を得るであろうか？」(Scherrer/Wysling 1967, S. 211) という覚書の形で見られる。V. コセンティーノ (Cosentino) は、「インディアン的」という語には、新世界の原始的な面が含まれている、と説明している⁴。

アイレルト (H. Eilert) に拠れば、ドイツ語圏のホイットマン受容の最初の段階は1908年から1910年にかけてその頂点を極めたようである。しかしマンは、世間でホイットマンのブームが起きて彼を讃える風潮を未だ「或る種の意外の念を持って」(mit einem gewissen Befremden) (Ibid., S. 100) 眺めていたのである。以上を見れば、マンのホイットマンとの最初の接触は噂という形で、恐らく1908年以降ではないかという推測が成り立つ。

ホイットマンが『草の葉』(*Leaves of Grass = Grashalme*) を自费出版したのは1855年のことだが、そのドイツ語訳は1868年⁶以降かなりの数が世に出ている。尤も正確な翻訳はあまり多くなかったようである。その中でも1889年にチューリヒで出版された『草の葉』はドイツ系アメリカ人カール・クノルツ (Karl Knortz) とアイルランド人ロールストン (T. W. Rolleston) による共訳であり、この本の出版後、フランスでは既に象徴主義の作家集団らの内でホイットマンの支持者が出来ていたが、ドイツでも暫く北アメリカ人の作品との生産的な取り組みが始まったのである。(Vgl. Eilert 1992, S. 98) 以後様々な議論が成されたが、ニーチェの「超人」(Übermensch) との関連を説く者や、「新しい救世主」(Yankee-Heiland) として賛美する者もいた (Ibid., S. 98)。

尤も当時のマンのように訝しげな見方をしていた者もいたが、それ以外にも1905年の論文でホイットマンの同性愛的傾向を取り上げて、彼の

「人間愛はデモクラシーとは無関係であり、彼の僚友達は、その肉体的なタイプが彼を引きつけるような選ばれた者達だ」という過激な結論に至ったベルツ(E. Bertz)のような批評家もいた⁸。更にその5年前の1900年にノルウェーの作家クヌート・ハムスン(Knut Hamsun)のホイットマンに関する論文が『ディー・ゲゼルシャフト』誌(*Die Gesellschaft*)に掲載されたが⁹、彼のことを「野蛮人」(einen Wilden)であり、彼の文体は英語ではなく全然文化言語に入らないし、インディアンの力強い比喩的言語の比喩のないものだ¹⁰、と痛烈に批判している。確かにハムスンは彼のことを叙情的で活発なアメリカ人で、彼自身稀な長所も持っている(Ibid., S. 30)、豊かな心の持ち主、天賦の才がある人間だ(Ibid., S. 34)と一応控え目な評価をしているが、それで批判的な全体のトーンが収まっているわけではない。

マンの手紙や覚書の内容を考えに入れると、彼のホイットマンへの注目は、良きにつけ悪きにつけ、1908年以降だと先に述べたが、ここでもう一度ハムスンを含めて考えてみよう。ハムスンの論文が載った『ディー・ゲゼルシャフト』には、興味深いことにマンの短編小説『ルイスヒェン』(*Luischen*)も収められているのである。ハムスンの論文は24ページから35ページにかけて、マンの『ルイスヒェン』は同35ページの下より50ページにかけてである。この雑誌はドイツの自然主義の代表的なもので¹¹、『ルイスヒェン』はそれまでに二つの雑誌社に掲載を断られているが、結局マンがかつて自分の作品を載せたことのある『ディー・ゲゼルシャフト』誌に落ち着いたのであった。(Vgl. Ibid., S. 95f)

マンは、1894年19歳の時に、ミュンヘンでジャーナリストになるための勉強をして、ミュンヘン大学と工科大学の聴講生となるが、より重要だったのは、初期の読書体験であった。ハイネ(Heine)、シュトルム(Storm)に続いて自然主義や印象主義の作家達、ヘルマン・バルやポール・ブールジェ(Paul Bourget)、イブセン(Ibsen)等の他にハムスンの作品もマンは読んでいる。ついでに言うと、その後1895年よりニーチェ体験が続いていくわけである¹²。マンは自分の初期の作品でバルの文体、それから後にハムスンのそれを模倣¹³したことを『自分のこと』(*On myself*)という講演(Vgl. Mann 1994, S. 56)で語っている。

マンの読書体験、ハムスの文体の模倣ということを踏まえるなら、マンは1900年当時ハムスに興味を持っていたのは明白であり、同じ雑誌の同じ号に、しかも自分の短編の前に載っていたハムスのホイットマン批判の論文に目を通したことは容易に想像出来る。そうするとマンが初めてホイットマンに触れたのは、ハムスの批判を通じてではあるが、1900年ということになり、1908年以降という先に述べた推測とは一致しなくなってくる。勿論我々はその正確な時期は想像するしかないが、ハムスを考慮するとしたら、それは1900年と仮定する方が妥当ではないだろうか。

II

マンの1908年から1910年頃までのホイットマンに対するイメージは余り良いものではなかった。しかもそれ以降次第に本格的に彼はホイットマンと取り組み、肯定的な見方をするようになっていくのである。

その成果として講演『ドイツ共和国について』があるわけだが、そこで引用されているマンのホイットマンについての知識は、1920年と1922年に出版された或るホイットマンの作品の翻訳に負うところが大きいとされている。その翻訳はマンが手紙の中で「ライジ」と呼ぶ、彼の数十年にも渡る友人、家族の友人でもあったハンス・ライジガー (Hans Reisiger) (1884—1968) の手によるものであった。彼は翻訳家、エッセイスト、小説家であり、翻訳家としてはホイットマンを始め、サン・テグジュペリ (Saint Exupéry)、フロベール (Flaubert)、ガンジー (Gandhi)、キップリング (Kipling) 等の作品を手掛けている¹⁴。しかし彼は、学問一辺倒の堅物ではなく、ユーモアのある人間的に見ても魅力的な人物であったようだ。ライジガーは、1947年の長編小説『ファウストゥス博士』 (*Doktor Faustus*) に出てくるリュウディガー・シルトクナップのモデルとしても知られている¹⁵。

ホイットマンの作品としては、ライジガーは1920年に最初の選集の訳を出して、1922年にトーマス・マンが懇意にしていたベルリンのS. フィッシャー社より、『草の葉』の完訳と散文作品の選集『ウォルト・ホイットマン選集 2 巻本』 (*Walt Whitmans Werk in zwei Bänden*) という

タイトルで出版している。(Vgl. Eilert 1992, S. 102f.) この2巻本はドイツにおけるホイットマンの翻訳全体の一時的な到達点を表しているに過ぎない。(Vgl. Wißkirchen 1992, S. 33) 到達点と一応言えるのは、ライジガーのかなり正確な翻訳と共に、それに添えられている序文の内容の素晴らしさが理由である。彼は序文で詳細にホイットマンの伝記について (Vgl. Ibid., S. 33), 即ち彼の「生涯・人物像・思想を芸術的に描き出し (Cosentino 1970, S. 226), 「作家への共感と鋭い洞察」 (Ibid., S. 226) を行っているのである。

チューリヒにあるトーマス・マンの遺稿図書館には、この『2巻本』がある。その中には線で印が付けてあり、マンが熟読したことが窺える。(Vgl. Wißkirchen 1992, S. 33f.) しかしながら H. ヴィスキルヒェンに拠れば、マンはその本を「決して全部は読んでいなかった。彼の読書はいつものように選択的 (selektiv) であった。ライジガーの序文と『民主主義の展望』 (*Democratic Vistas = Demokratische Ausblicke*) (1871) の最初の半分を、ホイットマンの80ページのエッセイを彼は集中的に読んだ。残りは、特に叙情詩は恐らく本当にただめくった (geblättert) だけだ」 (Ibid., S. 34) という。コセンティーノは、マンが印を付けた箇所は50を超えており、その内の40箇所が序文と『民主主義の展望』の訳にある、と説明している。(Vgl. Cosentino 1970, S. 226)

このライジガーによる翻訳の2巻本からマンは『ドイツ共和国について』においてホイットマンの思想を引用したが、その翻訳の素晴らしさを1922年4月16日の『フランクフルター・ツァイトゥング』 (*Frankfurter Zeitung*) 紙上に公開状という形で発表している¹⁶。彼はその2巻本を「この偉大で重要な、寧ろ神聖なる贈り物」 (diese große, wichtige, ja heilige Gabe), 「本当の神の贈り物」 (ein wahres Gottesgeschenk) (GW. X. S. 626f.) と呼んで、ライジガーと彼の業績に対して心より感謝をしているのである。

しかしその1年前には既にマンは、ライジガーによるホイットマン訳の内容を知りえていた模様である。マンの1921年5月31日付けの日記では、ライジガーが彼の翻訳を話して、ホイットマンの「男同士の愛」 (Männerliebe) が話題に出た様子が記されている¹⁷。

ここで『共和国』の成立やその前後に目をやってみよう。講演原稿が書かれ始めた時期は、1922年7月のものである¹⁸。上述のホイットマンが話題に出た頃、即ち1921年5月には『魔の山』(Der Zauberberg)の第5章の最後「ヴァルプルギスの夜」(Walpurgisnacht)が終了している。同年の6月10日には別の講演『ゲーテとトルストイ』(Goethe und Tolstoi)の原稿にマンは着手して、その後『魔の山』の第6章の「移り変わり」(Veränderungen)の執筆が始まる。そして『共和国』直前、1922年7月の初めにはやはり『魔の山』の第6章の内「激怒、そして何ともやりきれないこと」(Jähzorn. Und noch etwas ganz Peinliches)まで進捗していた。つまりマンの日記の記述を元に考えるとしたら、1921年5月以降という時期に限定すると『魔の山』の第5章の末尾から第6章の半分、加えて『ゲーテとトルストイ』のこの二つが『共和国』より前に執筆されており、『共和国』講演を理解する上で非常に意味があると思われる。

III

ホイットマンのこの時期の影響に関してよく指摘されることは、「ヴァルプルギスの夜」におけるハンス・カストルプとショーシャ夫人との会話である。これはカストルプの愛の告白でフランス語でなされるが、この部分にホイットマンの詩『肉体を歌う、電気を帯びた肉体を』(I Sing the Body Electric = Ich singe den Leib, den elektrischen)の内容が部分的に嵌め込まれていることを、J. A. ハント (Hunt) が立証している¹⁹。ここでそのホイットマンの影響があるという箇所を引用してみよう。

「人体組織ノ驚嘆スベキ対称ヲ見タマエ、左右ノ肩、左右ノ腰、胸ノ左右ノ花ノヨウナ乳首、対ニナッテ行儀ヨク並ンダ肋骨、軟カイ腹部ノ真中ノ臍、股間ノ黒イ宝庫! 背中ノスベスベシタ皮膚ノ下デ肩胛骨ガ動クサマヲ見ヨ、水タシイ豊満ナニツノ臀部ニ向カッテ背骨ガ走りオリルサマヲ見ヨ、軀幹カラ腋窩ヲ通ッテ四肢ヘ走ル脈管ト神経トノ太イ枝ヲ、ソシテ、腕ノ構成ガ脚ノ構成ニ対応スルアリサマヲ見タマエ。」(GW. III. S. 477) ²⁰

次にホイットマンの『肉体を歌う、電気を帯びた肉体を』からの一部を見てみよう。

「頭、頸、髪、耳、耳たぶと鼓膜、眼、瞼毛、眼の虹彩、眉、眼瞼の目覚めと眠り、口、舌、唇、歯、上顎、顎、顎の蝶番、鼻、鼻孔と腔壁、頬、こめかみ、前額、おとがい、咽喉……」¹²

ホイットマンの詩はこのように人間の体を事細かく、「極端に素朴な仕方、敬虔な忘我的陶醉のうちに……有機的構成に従って (nach seinem organischen Aufbau)」（GX. XI. S. 845f.）列挙していく。マンの言葉を借りるならば、これは「解剖学的な讃歌」（ein anatomischer Hymnus）（GW. XI. S. 845）とも言えるだろう。この詩は「詩人を彼が愛した男や女達に結び付けるエロチックな魅力を述べることに、肉体と魂が等しいと表明することで始まる」²²のである。この詩は、ライジガーによって英語からドイツ語に翻訳されたものを、マンが更にフランス語に直して『魔の山』の重要な場面に使用した。H. ハットフィールド（Hatfield）は、ホイットマンの詩はこうした重訳によって二重に異化されている、と説明している。つまりフランス語は対象への必要な距離を作り出して、作者も又ホイットマンへ距離を保たねばならなかった、出典を出来るだけ秘密にしておかねばならなかった、とマンの目論見を解釈している。

（Vgl. Hatfield 1962, S. 368）この頃のマンの関心を調べるために『ゲートとトルストイ』の方にも目をやってみよう。この講演の内容は多岐に亘っており、要点を述べることは容易ではない。しかしながら、一つのポイントは「死への共感」（Sympathie mit dem Tode）という定式で表されるロマン主義的世界から、『魔の山』でも提起された「生への奉仕」（Lebensdienst）という語で代表されるような所謂「ゲートの」世界への歩み寄りの過程ではないだろうか。この「生」と「死」の問題、これらを包括する舞台とでも言えるのが、「肉体」（Körper）であろう。例えば、同講演の中でロシアの小説家メレジコフスキー（Mereschkowski）がトルストイのことを、「魂の幻想家であるドストエフスキー（Dostojewski）と区別して、「肉体の偉大なる予言者」（den großen Seher des

Leibes) と呼んでいることを引用して、続けてマンは、「実際彼が愛を、最も深い関心を寄せているのは肉体なのです。彼の知識は肉体と関連し、彼の天才は肉体によって規定されています」(GW. IX. S. 126) と述べている。

また別の所でもマンは、「死は極めて感覚的な、極めて肉体的な問題です」と言い、又してもトルストイを引っ張り出して、彼が「肉体や、肉体的生命としての自然に、非常に感覚的な関心を持つが故に、あれ程までに死に関心を持つのか、——或いはその逆であるのか、これは回答困難な問題です」(GW. IX. S. 144) とトルストイにかこつけてはいるが、これは自分自身の関心、肉体への関心について述べているのである。「生」と「死」という両方の方向に向けられた「愛に満ちたこの関心」(dieses liebende Interesse)、これは「有機的な共感」(organische Sympathie)、「有機的なものとの共感」(Sympathie mit dem Organischen) (GW. IX. S. 144) と言い換えが可能だと思うが、この共感を引き起こすのが「肉体」なのである。

ホイットマンにおいては、あのカタログ的に肉体の細部を挙げているのを見れば、「肉体」が彼の詩作の中でいかに重要な意味を担っていたのかがわかる。そのホイットマンの詩『肉体を歌う、電気を帯びた肉体を』を、「ヴァルブルギスの夜」にフランス語の「脚色」²³を施してマンが引用しているということを見れば、1922年より前に成立していた『ゲーテとトルストイ』の「有機的なものとの共感」も、ひょっとしたらホイットマンを知っていたからこそマンの中で整理されたのではないだろうか。後に触れることとなるが、これには恐らくノヴァーリスも関係している。つまり『ドイツ共和国について』の前の『魔の山』と『ゲーテとトルストイ』の両方には、「肉体」を舞台とした「死」から「生」への指向性が表面に出てきているのである。

IV

さてマンのホイットマン理解の様子が最も顕著に現れているのが、『ドイツ共和国について』であるというのは誰もが納得するところであろう。この講演はゲールハルト・ハウプトマン (Gerhart Hauptmann) の60歳

の誕生日を記念し行われた。大統領フリードリヒ・エーベルト (Friedrich Ebert) も出席しており「半ば政府後援の国家的行事の観」²⁴があった。

1922年という時期は、ドイツの敗北で幕を閉じた第一次世界大戦の後、1918年11月9日にベルリンで革命が起こり、1919年の民主憲法の採択により誕生したヴァイマル共和国の黎明期であった。この共和国はそれからナチズムの台頭までの14年間しかもたなかったのだが、1922年は未だ保守的な勢力が強く、共和国をよかれと思う人は比較的少なかった時期でもあった。その共和国を支持しようとしたこの講演では、会場となったベルリンのベートーヴェン・ホールでドイツ青年達が足で床を擦って騒ぐ一幕もあった。というのは、マンの政治的な「転向」が明白となったからである。ほんの数年前、1918年10月、ドイツの敗北の色が濃厚となり、革命の勃発直前に出版された『非政治的人間の考察』 (*Betrachtungen eines Unpolitischen*) でマンは「反政治的・反民主主義的」 (antipolitisch-antidemokratisch) (GW. XI. S. 828) な理論を展開して、西欧的な「文明」に対抗して、ドイツ的な「文化」を擁護した。彼は、「政治としての」デモクラシーを否定しており、次の引用からも看取出来るように、マンにとってデモクラシーはあくまでも「モラル」 (Moral) であるべきであって、決して「政治」 (Politik) であってはならないのである。

「デモクラシーとは、上から来るものであって、下から来るものではない。……デモクラシーは権利の要求であるべきではない。それは篡奪や不遜な要求ではなく、退位であり、恥じらいであり、断念であり人間性であらねばならない。……デモクラシーは……倫理 (モラル) であるべきであって、政治 (ポリティーク) であるべきではない。それは、人間が人間に寄せる善意、両方の側からの善意であらねばならないのだ。」 (GW. XII. S. 485)

また、マンはヴァーグナーに仮託してはいるが、『考察』の「政治」の章において次のように言う。

「ヴァーグナーは、西欧的な意味でのデモクラシーはドイツにとっては異質な舶来もの、翻訳もの、非ドイツ的なもの(fremdartig, übersetzt, undeutsch)であることを執拗なまでに繰り返し主張し、これを憎悪した。しかもデモクラシーに対する彼の憎悪は、政治そのものに対する、政治的なもの全てに対する憎悪に他ならなかった。というのは、彼の眼には、政治的なものそれ自体が非ドイツ的、反ドイツ的なもの(undeutsch, widerdeutsch)と映ったからである。」(GW. XII. S. 233)

『考察』の頃のマンは、ドイツが「西欧デモクラシー流の信念に改宗」して「そうすることによって、自己を『政治化する』(politisieren) (GW. XII. S. 257) ことを憂慮していたのである。そしてここ『共和国』講演において、『考察』以来保守主義的なドイツの傑出した代表者に、「保守主義革命」(Konservative Revolution)の精神的な先駆者に数えられていた人が、過激な急転回を(einen radikalen Schwenk)をして、それまで忌み嫌っていた共和国の肩を公然と持ったのだから、センセーションを起こしたわけである。(Vgl. Wißkirchen 1992, S. 27) 勿論右寄り報道関係の反応は、それに応じて激しいものであった。マンは「転向者」「変節者」的な行為([das] Renegatentum) (Ibid., S. 27)を責められても、当然のことながら真向から反論出来るような立場ではなかったのである。マンは自らの「転向」に関して次のように言う。

「意外な、面くらわせられる、軽々しくさえある志操の変化(eine Sinnesänderung)、変化の問題であるということ、それが殆どの大方の意見と見えた。この方の意見は誤っている、……私は志操の変化などというものを知らない。事によると考えは変えたかも知れない——しかし志操を変えたことはない。(Ich weiß von keiner Sinnesänderung. Ich habe vielleicht meine Gedanken geändert, —nicht meinen Sinn.) (GW. XI. S. 809) (圏点はマンによる強調)

マンの中では、『考察』と『共和国』との相違は単なる「思想相互の矛盾」(ein Widerspruch von Gedanken)のみであり、「自身に対する矛

盾」はないとして、『考察』の志操である「ドイツ的人間性」(deutsche Menschlichkeit) (GW. XI. S. 810) は一貫していると主張する。それ故に、「私は何一つ取り消しません。本質的な点は何一つ撤回しません。私はあの時真実を述べたのですし、今日も真実を述べているのです」(GW. XI. S. 829) という発言も余り説得力が見られないにしても、どうしても力説せずにはいられないのである。マンにとって常に大事だったのは「ドイツ的人間性」ではなかったであろうか。

V

さてその「ドイツ的人間性」を守るために、マンはデモクラシーを受け入れて、「君主主義者」(Monarchist) から「共和制支持者」(Republikaner) へと変わるのだが²⁵、これには特に外面的な政治的出来事、右翼による外務大臣ヴァルター・ラーテナウ (Walther Rathenau) の暗殺 (1922年6月24日) が重要であったことはほぼ間違いないであろう。ラーテナウは、ハウプトマンの親友で、S. フィッシャー社から自分の全集を出版している作家・財界人・政治家と色々な面を持っている人物であった。ユダヤ人であるラーテナウは、ドイツの戦後処理のために奔走していたが、かつての「匕首伝説」を利用する極右のテロリストらに憎まれていた。更に、「従来から右翼国粋主義の特徴であった反ユダヤ主義が彼等の中に強く根を張り、ユダヤ人で枢要な地位に立った人々は何れも彼等の暗殺目標となった」²⁶のである。その前の1921年8月26日に同じくユダヤ人で、大蔵大臣も務めていたマティアス・エルツベルガー (Matthias Erzberger) も右翼の犠牲になっており、他にも数々のテロ事件が起こっていた。トーマス・マンもラーテナウの暗殺を1922年7月8日のベルトラム (E. Bertram) 宛の手紙の中で、「ひどいショック」²⁷と表現している。この時期よりマンは『ドイツ共和国について』の執筆を開始し、この講演を「一種のマニフェストの形に仕立てあげて、その中で私に耳を傾けている若者の良心に訴えよう」(Ibid., S. 112) と試みるのである。ちょうど「ドイツ性」「真の庶民性」を体現しているかの存在、「民衆の王」「共和国の王」として見做されているハウプトマンのための記念講演でもあり、若者に共和国、デモクラシーを納得させるには良い機会では

なかったか。そのようにしてマンは「ドイツ性」を「ドイツの人間性」を擁護しようとするのである。

ではマンはどのようにして「ドイツの青年の心を掴む」(GW. XI. S. 812)のか、どのようにして彼らを「共和国の側に」、 「民主主義と呼ばれているものの側に獲得」(GW. XI. S. 819)するのか? 『共和国』講演は、ノヴァーリスとホイットマンについての講演として構想された(GW. XI. S. 832)ので、ドイツ・ロマン派の代表者の前者と、アメリカのデモクラシーの詩人の後者という2人の思想を中心に話が進んでいく。マンは「民主主義を、共和国をドイツ・ロマン派と関連付けるとのこと——これは驚愕して身を固くしている国民同胞の方々に、民主主義と共和国とを納得出来るものにするを意味するのではないでしょうか」(GW. XI. S. 832)と言い、ロマン派と慣れ親しんでいるドイツ人とデモクラシーを結び付ける試みに触れている。しかしこれは一見したところ困難だと思われる。というのは、後の別の講演『ドイツとドイツ人』(*Deutschland und die Deutschen*)でマンが言うのは、ドイツ人は政治には不適格だということである。

「彼ら〔筆者注：ドイツ人〕は政治を冀真面目なやり方で誤解することによって、政治に不適格であることを証明します。……ドイツ人は、政治とは虚偽・殺人・欺瞞・暴力以外の何物でもなく、完全且つ一面的に汚らしいものに他ならないと考え……」(GW. XI. S. 1140)

このようにマンはドイツ人の特性を挙げ、彼等に民主主義を理解させるのは困難のように見える、と述べているが、同じ講演の中でドイツ人はロマン主義と深く結び付いていることを指摘している。(GW. XI. S. 1142f.)ここでノヴァーリスを引用して、ドイツ人に内在するロマン主義への親近感に訴えかけるのである。

マンに拠ると、ノヴァーリスとホイットマンには、類似点が見られる。例えば、ホイットマンが「共同体の理念に最も深く性格と色彩を与えるのは、正に完全な個人主義の理念である」²⁸というのに対応するものとして、マンはノヴァーリスの「普遍的なものが持つ個性的色彩が、その口

マン的要素である」(GW. XI. S. 835)²⁹という言葉を挙げている。ホイットマンは次のように言う。

「けだし我々が強力な共同体化と強力な結合を促進するのは、主として、あるいは専ら個々の人間の独立性を強めるためであって、……」
(GW. XI. S. 835)

マンはこの文章から「国家を形成しようとする個人主義の本能、人類の個々の成員それぞれの中に人類があることを承認した上での共同体の理念 (die Idee der Gemeinschaft), 人間性の理念 (die Idee der Humanität) はドイツ的であります。或いは普遍ゲルマン的であります」(GW. XI. S. 835) という結論を導き出し、ホイットマンの考えが意外なほどドイツ的で、身近なものであるので、共和国もそれほど悪くはないと示唆する。他方でノヴァーリスは「共同体、多元性は我々の最奥の本質である」³⁰、「哲学は組織や国家を通じて個人の力を人類と宇宙の力によって強化し、全体を個人の器官に、個人を全体の器官にするが、生に関しては、詩 (ポエジー) が同じ役割を果たす。個人は全体のうちに生き、全体は個人のうちに生きる³¹。詩 (ポエジー) を通じて、有限なるものと無限なるものとの最高の共感と共同行動が、極めて緊密な共同体が成立する」(GW. XI. S. 837f.) と言う。神秘的ではあるが、「全体」が成立するためには、「個人」が肝要であるとノヴァーリスは捉えている。この点でホイットマンが言う共同体化の促進は個人の独立性のためである、という文と内容的に近いものが見られる。

ノヴァーリスは、マンが『共和国』以前の『ゲーテとトルストイ』で問題にしている「有機的なものとの共感」(GW. XI. S. 845) を持ち合わせている。「本来官能的な機能 (共感) は最も神秘的な機能であり、殆ど絶対的な、或いは絶対的な合一 (混合) を強く要求する機能、乳び汁の機能である。」(GW. XI. S. 845)³²

1920年8月18日の手紙の中でマンは、ノヴァーリスの『夜の讃歌』(Hymnen an die Nacht) に触れ、ロマン主義の傾向は「極めて肉欲的な領域」(ein äußerst wollüstiger Bezirk) (Mann, Erika (Hg.) 1978, S.

182)であると書いている。この発言からもマンは、ノヴァーリスのことを「有機的なものとの共感」を持つ作家として考えていたことが分かる。ノヴァーリスが「世界に神殿は一つしかない。それは人間の体 (der menschliche Körper) である。この高き姿にもまして聖なるものは存在しない。……人体に触れることは天に触れることである」(GW. XI. S. 845)³³と言う時、「ヴァルプルギスの夜」でカストルプが肉体を賛美している場面が連想される。

当然ホイットマンにおいても「有機的なものとの共感」がある。それは『カラマス』(*Calamus*)に現れているような同性愛的傾向のあるもので、「猥褻な男根の象徴で表現されるような意味」(GW. XI. S. 844)を持っている。彼は戦争で特に顕在化して強化されるような男性同士の「戦友愛」(GW. XI. S. 848)を重視し、これによって「一般的な政治に対しても深遠な関係を持つこと」³⁴を理想としている。彼の言おうとしているのは、「民主主義にはひどく愛情に満ちた同志愛という意味が込められて」おり、「こういう愛がなければ、民主主義は不完全なものとなり、空しいものに終わり、自己を存続させることも不可能となろう」(Ibid., S. 982)ということなのである。ホイットマンの理想とする民主主義は「社会的エロティシズム」(soziale Erotik) (GW. XI. S. 833)に立脚したものである。

マンが講演に引用している詩『我が胸の香り高い草よ』(*Scented Herbage of My Breast*)の次の箇所を見てみよう。

「それでも君は僕には美しい、君深く色づいた根よ、君を見れば僕は死のことを想う／君の贈り物なら死も美しい、(一体死と愛を除いたら真底美しいものがあるだろうか)、／……だって僕には分かっている、君達が、愛と死である君達が、今では何にもまして僕のもので、分かちがたく一つに重なり合っていることが、……」(GW. XI. S. 850 /Vgl. Kaplan (ed.) 1982, p.269)

「愛と死」が一つになっているというのは、全くロマン主義の定式ではないだろうか。同じ詩の中の「死のために」(für den Tod)、「ならば

死であろうと生であろうと僕は一切無頓着」(Tod oder Leben erscheint mir dann gleich)という箇所にもンは下線を引き、しかも>>Nov.<<という略記号を付けている。ヴィスキルヒェンに拠ると、これはノヴァーリスを指している。(Vgl. Wißkirchen 1992, S. 36) もんはホイットマンの中にノヴァーリスを見ていたと考えられるだろう。もんがノヴァーリスを知るのは日記の記述に拠れば、1921年5月のことだが(Vgl. de Mendelssohn (Hg.) 1979, S. 515f.)³⁵、恐らく既に親しんでいたかも知れない。1921年5月だとするとホイットマンを本格的に知る直前になり、ホイットマンの詩を読むとき、ノヴァーリスの要素を読み取ったと想像出来る。もんのホイットマン理解はノヴァーリスが基礎となっているのではないだろうか。

VI

もんのホイットマン理解はノヴァーリスが基礎となっていると上述べたが、これにはライジガーの序文の役割を見逃すわけにはいかない。ライジガーはホイットマンの同性愛的傾向を否定的には描いていない。ヴァーゲット(H. R. Vaget)に拠れば、彼はそれを当然の事として扱った最初の人物であったのだ³⁶。それにもんも自身の同性愛的問題があるので、ホイットマンに入り易かったのだろう。更にワンダーフォーゲル運動の指導的な理論家と見做されているハンス・ブリューアー(Hans Blüher)の著作『男性社会に於ける性愛の役割』(*Die Rolle der Erotik in der männlichen Gesellschaft*)を読んだことも係わって来る。もんのホイットマンの詩の読み方もその本に「操作された」という。(Vgl. Wißkirchen 1992, S. 34) もんは「有機的なものへの共感」に『共和国』講演で触れている。

「死と病気に対する関心、病理的なもの、没落に対する関心は、生に対する、人間に対する関心の別種の表現にほかならず、……有機的なものに対して、生に対して関心を持つ者は、特に死に対して関心を持ちます。そして、死の体験は結局、生の体験であり、それは人間へと通じるものであることを示すことは、1篇の教養小説の対象たりうるでしよ

う.) (GW. XI. S. 851) (圏点はマンによる強調)

ここで表現されている「死」から「生」, 「死の共感」から「生への奉仕」への変化は是非やり遂げなければならないものである。もし出来なければ, 「死の共感」は悪しきロマン主義になってしまい, それを濫用しようとする人間の恰好の対象となる。それを防ぐために「ドイツの人間性」が必要とされるのである。

「ホイットマンが『デモクラシー』と呼んでいるものは, 我々が, 古風な言い方をすれば, 『フマニテート』と呼んでいるものに他ならない」(GW. X. S. 627) とマンが言うとき, 新しいフマニテートとしてのデモクラシーを保守的な市民に理解させなければ, 「ドイツ的人間性」は守れないと判断していたのであろう。G. ルカーチ(Lukács)はマンは当時, ヴァイマルのデモクラシーで孤立した立場にあったと説明する。それはデモクラシーとドイツの過去との間に橋を架けようとした唯一の作家だったからという³⁷。橋を渡すためにはマンはどうしても「少量のホイットマン」(ein Schuß Whitman) (GW. X. S. 627) が必要だったのである。

テキスト

Mann, Thomas : *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Frankfurt a. M. 1974. (本文中でGW.と略記)

『ドイツ共和国について』の邦訳は, 『講演集ドイツとドイツ人 他五篇』(青木順三訳1990年岩波書店)を参照させて頂いた。

注

- 1 Vgl. Mann, Erika (Hg.): *Thomas Mann, Briefe 1889-1936*. Frankfurt a. M. 1978, S. 77f.
- 2 Vgl. Wysling, Hans : *›Geist und Kunst‹. Thomas Manns Notizen zu einem ›Literatur-Essay‹*. In : Scherrer, Paul/Wysling, Hans : *Quellenkritische Studien zum Werk Thomas Manns. Thomas-Mann-Studien I*. Bern u. München 1967, S. 208.
- 3 Od. Vgl. Wysling, Hans (Hg.) unter Mitw. v. Sprecher, Thomas : *Thomas Mann. Briefe an Kurt Martens II. 1908-1935*. In : Heftrich, Eckhard u.

- Wysling, Hans : *Thomas Mann Jahrbuch*. Frankfurt a. M. 1991, Bd. 4, S. 187f.
- 4 Vgl. Cosentino, Vincent : *Walt Whitman's Influence on Thomas Mann, the "Non-Political" Writer*. In : Goetze, Albrecht/Pflaum, Günter (Hg.) : *Vergleichen und verändern. Festschrift für Helmut Motekat*. München 1970, S. 241. (『「非政治的作家」トーマス・マンへのウォルト・ホイットマンの影響』田中紀子・須摩 肇 (共訳) 帝塚山大学教養学部『帝塚山論集』第84号1996年)
 - 5 Vgl. Eilert, Heide : *›Komet der neuen Zeit‹. Zur Rezeption Walt Whitmans in der deutschen Literatur des 20. Jahrhunderts*. In : Frühwald, Wolfgang/Jäger, Georg/Langewiesche, Dieter/Martino, Alberto (Hg.) : *Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur*. Tübingen 1992, Bd. 17, H. 2, S. 100.
 - 6 ホイットマンの10篇の詩の最初の翻訳は、フェルディナント・フライリヒラート (Ferdinand Freiligrath) によるもので、1868年4月24日に有名な『アウクスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウング (Augsburger Allgemeine Zeitung)』に掲載された。Vgl. Wißkirchen, Hans : *Republikanischer Eros. Zu Walt Whitmans und Hans Blühers Rolle in der politischen Publizistik Thomas Manns*. In : Härle, Gerhard (Hg.) : *›Heimsuchung und süßes Gift‹. Erotik und Poetik bei Thomas Mann*. Frankfurt a. M. 1992, S. 33. (Fischer Taschenbuch Verlag)
 - 7 亀井俊介 : 『近代文学におけるホイットマンの運命』1970年研究社182-183ページ参照。
 - 8 Vgl. Law-Robertson, Harry : *Walt Whitman in Deutschland*. Gießen 1935, S. 49. Zitiert nach : Wißkirchen, Hans, a. a. O. S. 34.
 - 9 Vgl. Sandberg, Hans-Joachim. In : Bernini, Cornelia/Sprecher, Thomas/Wysling, Hans : *Internationales Thomas Mann Kolloquium 1986 in Lübeck. Thomas-Mann-Studien VII*. Bern 1987, S. 207.
 - 10 Vgl. Hamsun, Knut : *Walt Whitman*. In : Conrad, M. G. /Jacobowski, L. (Hg.) : *Die Gesellschaft*. Dresden u. Leipzig 1900, Bd. 16 Januar S. 24f.
 - 11 Vgl. Vaaget, Hans Rudolf : *Thomas Mann Kommentar zu sämtlichen Erzählungen*. München 1984, S. 144. Od. Vgl. GW. XI. S. 101. (*Lebensabriß*) マンはこの雑誌を『略伝』で「社会主義的自然主義の機関雑誌」と呼んでいる。又『自分のこと』(*On myself*)でも「過激な自然主義的な戦闘的雑誌」

- として『ディー・ゲゼルシャフト』誌に触れている。Vgl. Mann, Thomas : *Über mich selbst. Autobiographische Schriften*. Frankfurt a. M. 1994, S. 57. (Fischer Taschenbuch Verlag)
- 12 Vgl. Kurzke, Hermann : *Thomas Mann. Epoche—Werk—Wirkung*. München 1985 ; 2. Aufl. 1991, S. 40f.
- 13 Vgl. Marx, Leonie : *Thomas Mann und die skandinavischen Literaturen*. In : Koopmann, Helmut (Hg.) : *Thomas-Mann-Handbuch*. Stuttgart 1990, S. 178ff.
- 14 Vgl. Wysling, Hans (Hg.) unter Mitw. v. Fischer, Marianne : *Dichter über ihre Dichtungen*. München u. Frankfurt a. M. 1981, Bd. 14/III, Thomas Mann. Teil III : 1944-1955. S. 71.
- 15 Vgl. Wysling, Hans (Hg.) : *Thomas Mann—Hans Reisiger. Briefe aus der Vor- und Nachkriegszeit*. In : Faesi, Robert : *Blätter der Thomas-Mann-Gesellschaft*. Zürich 1968, Nummer 8, S. 3. ここには21篇の手紙が収められている。
- 16 Od., GW. X. S. 626f.
- 17 Vgl. de Mendelssohn, Peter (Hg.) : *Thomas Mann. Tagebücher 1918-1921*. Frankfurt a. M. 1979, S. 524.
- 18 Vgl. Bürgin, Hans/Mayer, Hans-Otto : *Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens*. Frankfurt a. M. 1965, S. 60.
- 19 Vgl. Hunt, Joel A. : *The Stylistics of a Foreign Language. Thomas Mann's Use of French*. In : *Germanic Review*. 1957, 32, p.19-34. Zitiert nach : Hatfield, Henry : *Drei Randglossen zu Thomas Manns Zauberberg*. In : Gruenter, Rainer/Henkel, Arthur (Hg.) : *Euphorion. Zeitschrift für Literaturgeschichte*. Heidelberg 1962, Bd. 56, S. 365.
- 20 原文はフランス語。邦訳は『魔の山 (上)』(高橋義孝訳 1987年 新潮社)を参照させて頂いた。
- 21 Kaplan, Justin (ed.) : *Whitman. Complete Poetry and collected Prose*. New York 1982, p.257. 邦訳は『ホイットマンの研究』(鍋島能弘 1970年 篠崎書林) 153ページを参照させて頂いた。
- 22 Hunt, Joel A. : *Mann and Whitman : Humaniores Litterae*. In : Beall, Chandler B. (ed.) : *Comparative Literature*. Eugene, Oregon 1962, vol. 14, p. 267.
- 23 Vgl. Reed, Terence J. : „Der Zauberberg.“ *Zeitenwandel und Bedeutungs-*

- wandel 1912-1924. In : Kurzke, Hermann (Hg.) : *Stationen der Thomas-Mann-Forschung. Aufsätze seit 1970*. Würzburg 1985, S. 109.
- 24 山口知三・平田達治・鎌田道生・長橋美生子『ナチス通りの出版社 ドイツの出版人と作家たち 1886—1950』1989年人文書院71ページ。
- 25 Vgl. Stammen, Theo : *Thomas Mann und die politische Welt*. In : *Thomas-Mann-Handbuch*. S. 27.
- 26 林健太郎『ワイマル共和国 ヒトラーを出現させたもの』1963年中央公論社93ページ。(中公新書27)
- 27 Jens, Inge (Hg.) : *Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910-1955*. Pfullingen 1960, S. 112.
- 28 Vgl. Kaplan, Justin (ed.) a. a. O. p. 942.
- 29 Vgl. Samuel, Richard/Mähl, Hans-Joachim/Schulz, Gerhard (Hg.) : *Novalis Schriften in vier Bänden. Das philosophische Werk I*. Stuttgart 1968, Bd. 2, S. 616.
- 30 Ibid., Bd. 3, S. 571.
- 31 Ibid., Bd. 2, S. 372f.
- 32 Ibid., Bd. 3, S. 425.
- 33 Ibid., S. 565f.
- 34 Vgl. Kaplan, Justin (ed.) a. a. O. p. 982. 邦訳は『アメリカ古典文庫5 ウォルト・ホイットマン』(亀井俊介・瀧田夏樹・夜久正雄・吉田和夫・鶴木奎治郎訳 1976年研究社)を参照させて頂いた。
- 35 元タマンは1920年7月にはゲオルク・ブランデス (Georg Brandes) の『ドイツに於けるロマン派』(*Die romantische Schule in Deutschland*)を通してノヴァーリスに触れている。(Vgl. *Thomas Mann. Tagebücher 1918-1921*. S. 450.)本文中でも引用した1920年8月18日のパウル・シュテエゲマン (Paul Steegemann)宛の手紙のノヴァーリスのイメージも恐らくブランデスの本より知ったのであろう。(Vgl. *Thomas Mann, Briefe 1889-1936*. S. 181f.)ノヴァーリスはH.クルツケ (Kurzke)に拠れば、保守革命の信奉者らに好まれていたようだ。(Vgl. Kurzke, Hermann : *Romantik und Konservatismus*. München 1983. S. 36-49.)
- 36 Vgl. Veget, Hans Rudolf : „*Wäre ich nur in die angelsächsische Kultur hineingeboren !*“ *Zur Archäologie von Thomas Manns West-Orientierung*. In : Heftrich, Eckhard/Sprecher, Thomas (Hg.) : *Thomas Mann Jahrbuch*. Frankfurt a. M. 1995, Bd. 8, S. 193.

37 Vgl. Lukács, Georg : *Auf der Suche nach dem Bürger*. In : *Thomas Mann*.
Berlin 1953, S. 30.

その他の参考文献

Kaes, Anton (Hg.) : *Weimarer Republik. Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1918-1933*. Stuttgart 1983.

Lehnert, Herbert/Wessell, Eva : *Nihilismus der Menschenfreundlichkeit. Thomas-Mann-Studien IX*. Frankfurt a. M. 1991.

下程 息 『「ファウストゥス博士」研究』1996年 三修社

脇 圭平 『知識人と政治—ドイツ・1914～1933—』1973年 岩波書店

Zur Walt Whitman-Interpretation bei Thomas Mann

Hajime SUMA

Der früheste Eindruck, den Thomas Mann von Walt Whitman hatte, war nicht freundlich. Am 26. August 1909 schrieb Th. Mann zum erstenmal über Whitmans Ruf in einem Brief an Walter Opitz : „Auf die jungen Leute hat Walt Whitman, glaube ich, mehr Einfluß, als er [=R. Wagner].“ Damals beschäftigte sich Mann bereits mit der Wagner-Kritik, so in *Versuch über das Theater*. Nach H. Eilert erreicht die erste Phase der Rezeption Whitmans im deutschsprachigen Raum in den Jahren 1908-1910 einen Höhepunkt. 1910, in einem Brief an Kurt Martens, erwähnt Mann verächtlich Whitmans „indianistischen Rousseauismus“, dessen Bedeutung eine primitive Seite der Neuen Welt darstelle. Der allgemeinen Interpretation zufolge ist Manns erster Kontakt mit Whitman nach 1908. Doch veröffentlichte 1900 der norwegische Schriftsteller Knut Hamsun bereits einen

Aufsatz über Whitman in der führenden Zeitschrift des deutschen Naturalismus „*die Gesellschaft*“, wo er sich über den Stil Whitmans kritisch äußerte. Interessant ist, daß auch Th. Mann in derselben Zeitschrift seine Novelle *Luischen* (1900) brachte. „Zu den frühen Leseerlebnissen gehörten H. Bahr, P. Bourget, Ibsen und K. Hamsun,“ hat Th. Mann in *On myself* geschrieben. So liegt die Vermutung nahe, daß Th. Mann Hamsuns Aufsatz gelesen hatte. Es war wohl sein erster Kontakt mit Whitman.

Th. Mann lernte Whitman durch die Übersetzung seines Freundes Hans Reisiger kennen : *Walt Whitmans Werk in zwei Bänden* (1922). In der Rede „*Von deutscher Republik*“ zitiert er ein Whitman-Gedicht und seine Kenntnisse über Whitman aufgrund dieser Übersetzung. Die Rede wurde am 15. Oktober 1922 in Berlin gehalten. Schon im Mai 1921 kannte Th. Mann den Inhalt der Übersetzung, z. B. die „Männerliebe Whitmans“. Zu dieser Zeit beschäftigte er sich mit *Walpurgisnacht im Zauberberg* und danach mit der Rede *Goethe und Tolstoi*. Es ist denkbar, daß die beiden Reden unter Whitmans Einfluß standen.

Im Kapitel *Walpurgisnacht* verarbeitet Th. Mann Whitmans Gedicht *Ich singe den Leib, den elektrischen*, umgekleidet diskret auf französisch. Th. Mann nennt das Gedicht „einen anatomischen Hymnus“. In der letzteren Rede geht es um das Interesse am Körperlichen, woran sich die Problematik von Tod und Leben anschließt. Dabei ist die „Sympathie mit dem Organischen“ von entscheidender Bedeutung. Eben das war auch für Whitman wichtig.

In den *Betrachtungen eines Unpolitischen* erklärte Th. Mann seine Absage an die Demokratie als „Politik“. Er schrieb darin : „Demokratie sollte Moral sein, nicht ‚Politik‘.“ Aber in der Republik-Rede bekannte er sich offensichtlich zur gehaßten Republik von Weimar. Th. Mann versucht, der deutschen Jugend die Demokratie und die Weimarer Republik schmackhaft zu machen. —Es sei angemerkt, daß hier neben Whitman Novalis eine große Rolle spielte. Den beiden

Schriftstellern ist vieles gemeinsam, so die „Sympathie mit dem Organischen“. Th. Manns Novalis-Lektüre datiert ab dem 8. Mai 1921, also vor den Whitman-Studien. Man kann sagen, daß seine Whitman-Studien unter dem Einfluß der Novalis-Lektüre standen.

Whitmans ideale Demokratie basiert auf der homoerotischen, sozusagen „sozialen Erotik“, wie sie sich in seinem Gedicht *Calamus* ausdrückt. Nach H. R. Vaget war H. Reisinger der erste, der Whitmans Homosexualität als eine Selbstverständlichkeit behandelte. Th. Mann mochte sich mit der Demokratie deswegen so leicht vertraut machen, weil Whitmans Homosexualität irgendeine Sympathie in ihm erwecken mochte.

G. Lukács erklärt, Th. Mann war damals isoliert, weil er der einzige Schriftsteller war, der eine Brücke zwischen der Demokratie und der deutschen Vergangenheit zu schlagen versuchte. Um die „Brücke“ zu schlagen, war für Th. Mann „ein Schuß Whitman“ offensichtlich unentbehrlich.